

## シカ

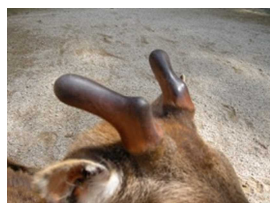
### 1. ニホンジカ

雪が降ると足跡が残り、確認しやすくなります。姿を見た人もあります。鳥取県東部では個体数が非常に増加し、植林地だけでなく、耕作地への被害も大きくなっています。中部地区では岡山県境近くから個体数が増加し、打吹山にも入ってくるようになりました。向山でも確認されています。

食痕や糞があれば、存在は確実です。ササの葉の食痕は、写真のように縦に噛みちぎっているため特徴が出ています。また、樹皮は幹の横から啗えて引っ張るため上下に樹皮がめくれ、大きく剥がれてしまいます。したがって全周を剥がされると、その木は枯れてしまいます。草や小さい木は先端部分を噛み取ります。イタドリのようなシュウ酸が強い草でも、アオキのように毒性のあるタンニンがあっても平気のようです。



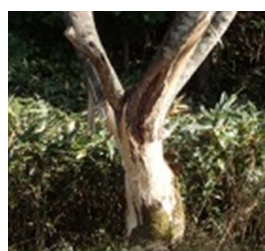
糞



袋角



ササの食痕



樹皮を剥がれた木

糞はウサギより少し大きめ直径1cm、長さ2cmくらいの長丸形で、ウシのように反芻する<sup>はんすう</sup>ためよく消化されていて繊維が見えず黒色です。まとめてポロポロと落としますので、同じ場所に集まって見られます。

雄のみにある角は、毎年春に落下して新しく生えてきます。初めは皮膚が覆っていて「袋角」とよばれますが、秋には皮膚が死に硬い骨化した角が現れますので危険です。雌をめぐる雄同士の闘いに用いるためです。10～11月には、雄が雌を求めて「フィー」と大きめの割にはか細い、物悲しい鳴き声を出します。人家近くでも聞くようになりました。鳴き声は存在を知るには手っ取り早い方法です。

### 2. カゴノキ

カゴの意味は「鹿の子」であり、幹の樹皮の模様がシカの子の明るい斑点に似ているところからの命名です。シカの夏毛には白点があり、春に生まれた子には明瞭な白点がたくさんあります。藪の中に隠れた時、白点が木漏れ日となって隠蔽効果を生むと考えられています。危険に遭遇した母親は、子を藪に隠して逃げ、子は母親が迎えにくるまで動かないといわれています。カゴノキの灰黒色の樹皮が円盤状に剥がれ落ちると、白っぽい跡が残り、鹿の子模様になるのです。幹の直径が20cmくらいより太くならないと、この模様が出てきません。



タブノキなどと同じクスノキ科ですが、このような樹皮の剥がれ方をするのはカゴノキだけです。特徴的ですので、遠くにあってもすぐわかります。シイ・カシ林に混じり、幹の直径が数十cmにもなる木で、四王寺山などには大径木が見られるのですが、打吹山では遊歩道を歩いても大木が見当たりません。しかし、近年、幼木がよく見られるようになりました。



上：カゴノキ

下：タブノキ

幼木は幹がタブノキやヤブニッケイに比べて少し黒っぽいだけで鹿の子模様が出ず、葉で識別しなければなりません。タブノキより細長くてシラカシに近く、緑が濃く、枝の先端部分に葉が集まる、冬芽がタブノキより尖っている、このような点から同定できると思います。成長の早い木ですから白点の目立つ幹がよく見られるようになるでしょう。